

上越市中ノ俣および愛媛県二神島の調査を中心とする 山村および漁村における民家・集落の比較研究(1) (梗概)

西 和夫
津田良樹

序

1. 研究の目的と方法

近年、各地の集落が次々に過疎の状況に陥っていることが指摘されている。交通の不便なこと、農作業の担い手がいないことなど原因についても種々の指摘がある。我々は過疎化の問題を論じる能力をもたないが、建築史を学ぶ者として、集落および民家の歴史をたどることがますます困難になる現状を座して見過ごすわけにはいかない。もちろん、今すぐに大切なのは過疎化に対処する方策であり、過疎に直面して悩む人々に少しでも資することのできる方法を探求することである。建築史がそれに直接答えを出すことはむずかしい。しかし、集落のたどってきた歴史を正確に把握し、先人たちから受け継いだ伝統の意味を考え直すことは、一見遠回りのように見えながら、その集落の存在理由と価値とを認識することに通じ、今後の展望に重要なヒントを与える可能性を秘めている。

我々が取り上げた新潟県上越市中ノ俣と愛媛県温泉郡中島町二神島（以下、それぞれ中ノ俣、二神島と略記する）は、いずれも過疎化の波が押し寄せ、集落の人々が自らの英知を結集しつつその対策に懸命になっている集落である。一方は山村、他方は漁村と、様相は大きく異なるが、集落構成、民家の様相、風俗習慣など、両集落ともさまざまな特色をもち、歴史的に大きな価値を秘めている。幸い機会あって両集落に入ることができた我々は、集落の人々の今後にも少しでも資することを期しつつ、建築史的な調査を行ってきた。この両集落の民家、集落構成、生活慣習をいくつかの視点に絞って取り上げ、個々の調査結果を提示するとともに、両集落の比較検討を行うおうとするのが本研究の目的である。

調査は、現地において民家の平面や構造をはじめ、敷地、集落内の道路や諸施設などについて実測調査を行い、文献史料を収集し、集落の人々からの聞き取りを行った。また、春秋の祭礼などに参加してその記録を取るとともに人々と話し合い、調査の内容を深め、また今後の展望等を検討してきた。人々の生活にできるだけ多く接しな

がら実測や記録を取るという方法を採用している。

2. 今回の報告について

今までの調査によって得た知見はさまざまであるが、本研究は2年にわたって研究助成を同一テーマのもとに受けており、今回は主に、民家の特色、祭礼から見た集落構成、生活慣習の特色、この3点を取り上げて報告する。

山村・漁村それぞれ1つの集落を調査しただけで、その結果をもって山村・漁村全般に論を及ぼすことはもちろんできない。山村については、中ノ俣だけでなく西隣の桑取や名立、さらに西の能生の諸集落についても調査を進めており、また漁村についても、二神島周辺の津和地島、中島などについても調査を進めているが、いずれにせよ2つの地点の知見に過ぎない。しかし、この2地点の集落を比較しながら検討するとき、単独の検討では見えてこないことが次第に見えてくることも明らかである。ここに報告するのはそのうちの一部に過ぎないが、論点を先に述べた諸点に絞って述べることにしたい。

1 中ノ俣と二神島

両集落の民家・集落の比較分析を行うに当たって、それぞれの位置・風土・歴史等について述べておく必要があるだろう。

1. 中ノ俣

1) 中ノ俣の位置・風土

上越市中ノ俣は信越本線高田駅の西方14kmほどに位置する、山の中の小さな集落である。昭和57年に高田からの県道が通ずるまでは、冬期は3～4 mにおよぶ積雪に鎖され、車は通ることができなかった。そのため夏場は山間の棚田に作付けられた水田耕作のかたわら、副業として炭焼き等^{*)}の山仕事を営んできた。

有間川の支流中ノ俣川が集落の中央を流れ、川沿いに82戸・290人（昭和57年）^{*)}が住む。かつては「中ノ俣百戸」と言われ、昭和46年には107戸・487人だったが、わずか10年ほどで人口が6割ほどに減少した。積雪4 mを越す冬の豪雪を嫌って若者が山を降り、過疎化が心配さ

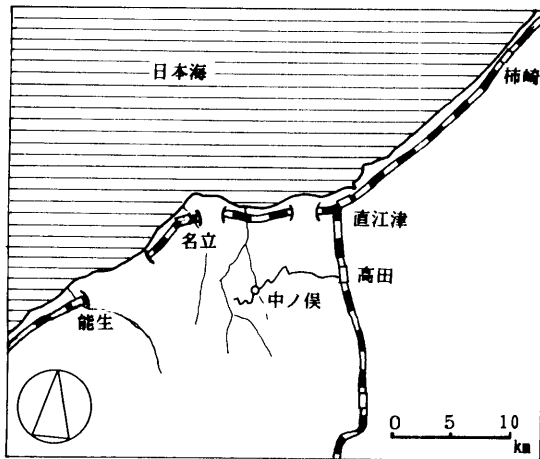


図-1 中ノ俣 (新潟県上越市)

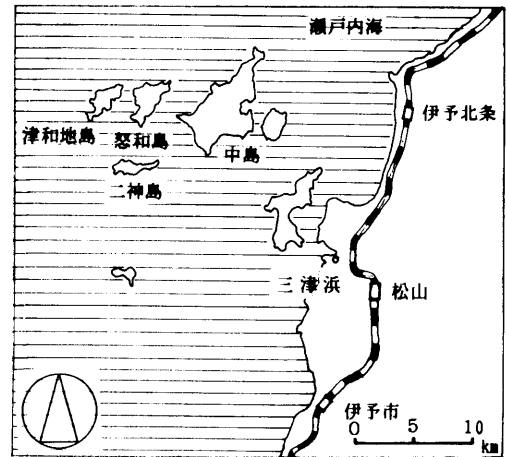


図-2 二神島 (愛媛県温泉郡中島町)

れている。80余棟の民家のうち70余棟が「くずや」と呼ばれる茅葺屋根だが、次々にトタン葺に替わり、また取り壊されて新しい家に替わり、さらに無住のものは冬期の積雪に押しつぶされ崩壊している。

2) 中ノ俣の歴史

平家の落人集落との伝承がある中ノ俣は、戦国時代に上杉謙信の春日山城へ村人7人が駆り出され、その7家は以後名字帯刀を許されたと伝えられている。落人伝説はともかく、春日山城との関係はありうることと思われるが、それを裏付ける史料を欠く。

中ノ俣は、江戸時代を通じ、春日山城主堀家・高田藩松平家・糸魚川藩有馬家・高田藩榊原家などの支配下にあり、正保2年(1645)の『検地帳』に「頸城郡中ノ俣村」とあるのをはじめ、天和3年(1683)の『越後国頸城郡村々惣高帳』に「中俣」、宝暦元年(1751)の地震被害の記録である『桑取谷、覚、御用留』に「中俣村」、天明2年(1782)の『山論濟国御請書之事』に「桑取谷吉尾組、中野俣村」、天明7年の『夫食一件留』に「中俣村」などと史料に村の存在が確認される²³⁾。村高は正保国絵図によると高196石余、天和3年の前掲『惣高帳』では343石余、明治元年(1868)の『旧高旧領取調帳』では348石余である。宝暦元年の『桑取谷、覚、御用留』によれば、人口は男212人・女214人・社2人・僧4人で合計432人、家数は本棟44・名子棟22で合計66であった。

2. 二神島

1) 二神島の位置・風土

愛媛県温泉郡中島町に属する二神島は、瀬戸内海の西部、松山市沖20kmに浮かぶ小島である。面積2.14km²、周囲10kmほどの東西に細長い島の中央部北側に港がある。港を中心に海岸沿いに延びる1本の町道の山側に、軒を接して人家が建て込んでいる。路地は家々の軒で覆われ昼でも薄暗い。

集落は西から本浦・小泊・向井・泊・脇之浜に分かれ、155戸・422人(昭和60年)²⁴⁾が住む。昭和39年には205戸・896人²⁵⁾だったが、20年ほどで人口が半分以下に減少した。この島でも過疎化が心配されている。

明治11年の『地誌下調』²⁶⁾は、「山、妙見山高サ七十間、米山高サ六十五間ト楚ヲ同シ峯ヲ分ツ、周囲島ニ同シ山脈連行ナシ、小松茂生、登路一條村ノ南七町字蔵床ヨリ上ル、三町稍陰ナリ、溪水ナシ、渡シナシ、川ナシ、橋ナシ、溝ナシ、堀ナシ」と説明する。山がちで川がなく、平地がほとんどないこの島の様相をよく示している。

また、同じ『地誌下調』は、「民業、男、農ヲ業トスル者百六拾五人、女、農ヲ業トスル者廿七人、魚獵ヲ業トスル者百三十人」と記す。明治11年当時この島が半農半漁であったことを示している。現在、若者が島外へ流出し、農業のみかん中心と変化した。生業は依然として半農半漁である。現在、農業はみかん栽培、漁業は一本釣・ごち網によるタイ、タコつばによるタコ漁等である。

2) 二神島の歴史

この島は、中世以来二神姓を名乗る土豪が支配していた。安養寺に伝わる大般若経に、元徳2年(1330)、二神嶋住人沙弥法善を大願主として僧信鏡が二神嶋の「浦御堂」において書写したという奥書があり、鎌倉期すでに安養寺の前身とみられる「浦御堂」があったことが判明する²⁷⁾。その後、江戸時代を通じて松山藩領に属し、その間二神氏が庄屋を代々務めてきた。村高は安永5年(1776)の『懐中万年鏡』²⁸⁾によると82石余、明治元年の『旧高旧領取調帳』では114石余である。戸数・人口は安永5年には76戸・450人、明治11年の『地誌下調』によれば127戸・673人であった。

3. 両地点の比較

中ノ俣は一年のうち3分の1ほど雪に鎖される雪国の山村である。一方、二神島は温暖な瀬戸内海に浮かぶ小さな島の漁村²⁹⁾である。対照的な2つの集落であるが、



図-3 中ノ俣の民家と集落

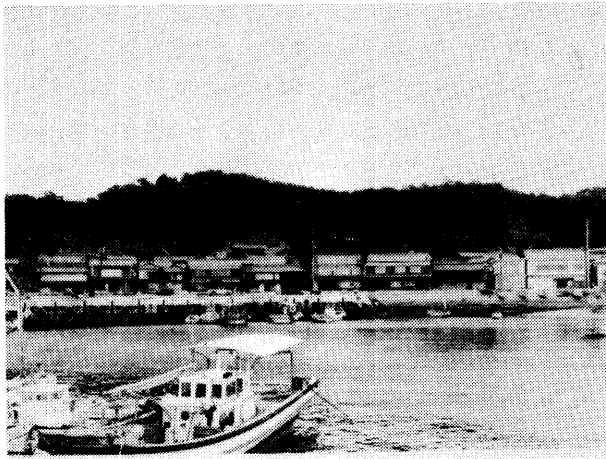


図-4 二神島の民家と集落

いずれも交通は不便で過疎化に悩まされている。集落規模は現時点ではそれぞれ82戸および155戸であり、二神島が中ノ俣の2倍ほどである。中ノ俣では棚田による稲作の単作が行われ、二神島は半農半漁である。

II 中ノ俣と二神島の民家の特色

1. 中ノ俣の民家

中ノ俣には茅葺の民家が70棟ほど現存しているが、近年は茅屋根を鉄板で覆うものが多い。以下実測調査を行った62棟のうち、近年の新築や改造の甚だしい9棟を除いた53棟について検討する。

昭和49年に新潟県の民家緊急調査¹⁰⁾が行われ、中ノ俣では牛木信一郎・橋場美喜蔵・下室政勝の3家が2次調査の対象となった。牛木・橋場両家は19世紀中ごろ、下室家は中ノ俣最古で19世紀前半とされている。しかし、「くずや」53棟を調査した結果、牛木喜九家が、同家蔵の『代々家柄覚』の2代喜助(天保9年没)の項に「天明五年乙巳ノ年家ヲ建ツ」とあり、上記3家の推定年代より古い天明5年(1785)であることが判明した。また、

長野浄水家は文化年間(1804~1817)¹¹⁾・北島一司家は天保年間(1830~1843)¹²⁾・牛木庶家は明治4年ごろ¹³⁾・田中悌二家は明治7年¹⁴⁾とそれぞれ判明した。これら建設年代が判明した建物を規準に細部形式等をもとに編年すると、中ノ俣には18世紀中期より19世紀後期にかけての民家が現存していることが明らかになった。すなわち、18世紀中期に属するもの2棟、18世紀後期7棟、19世紀前期3棟、19世紀後期3棟である。

中ノ俣の民家は、馬屋・出入口部分を前方に張り出す中門造りが5棟、直屋が48棟あり、それらはいずれも寄せ棟造りである¹⁵⁾。本屋の規模¹⁶⁾は桁行が6~11間、梁間が3.5~4.5間である。梁間4間の家が31棟で6割近くを占める。桁行9間・梁間4間の家が11棟で最も多い。直屋は桁行が8~9間、梁間が4間の家が18棟あり3割強を占める。中門造りの5棟は桁行7~9間、梁間4間である。このうち桁行9間のものは後世の改造により拡張されたものであり、これを考慮に入れば中門造りの本屋規模は、桁行7~8間、梁間4間と言えよう。中門部分は間口3間もしくは3間半で奥行3間ほどである。中門造りは馬屋と出入口部分を本屋から張り出しているためか、桁行が直屋に比べ若干小さい傾向がある。

平面は、牛木喜九家に見られるように大きなチャノマを中心にその上手にザシキ・奥にネマ、下手にナカマとニワ(土間)を配するほぼ共通する平面をもつ点に特色がある。チャノマは、3間×3間が41棟、3間×2.5間が12棟である。チャノマとナカマには囲炉裏がある。チャノマは板敷きで、畳は冠婚葬祭等の場合のみ敷き、普段はチャノマの片隅に積んでおく。氏神を祀る神棚はチャノマに、仏壇はザシキに置く。ザシキも普段はほとんど使わず、就寝はネマで行い、食事等の日常生活はナカマで行われる。ニワは農作業の場でありかつ物置としても使われる。

主屋の構造は、上屋と下屋からなる下屋構造および下屋をもたない素屋建てがあり、中ノ俣では前者をホンヤ、後者をスヤと呼ぶ。このうちスヤは7棟だけである。ホ

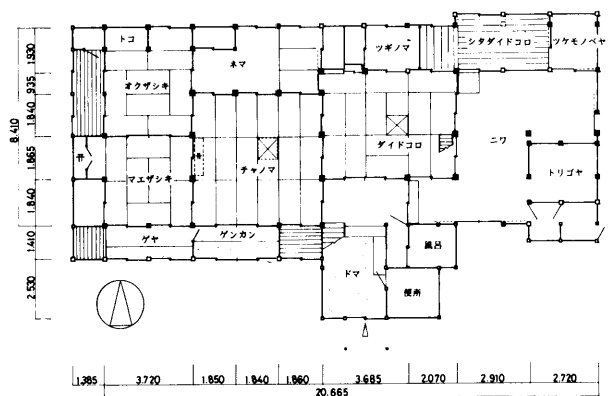


図-5 中ノ俣 長野浄水家現状平面図

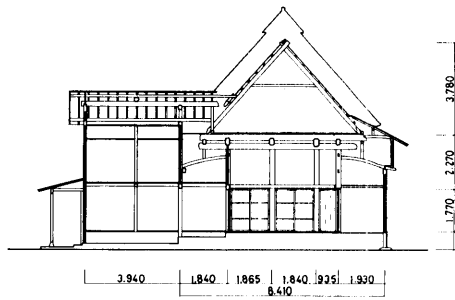


図-6 中ノ俣 長野浄水家現状断面図

ンヤは、7～8寸角の上屋柱を梁行梁で連結し、この上に柱筋ごとに桁行梁（最も前寄りの桁行梁をキャクラと呼ぶ）を架け、さらに梁行方向に上屋梁をのせる。上屋梁上の前後側柱筋よりそれぞれ半間内側の位置に椀首を組む。上屋と下屋は、部屋境では側柱上の側桁と上屋柱を水平のつなぎ梁でつなぎ、部屋境以外の場所では柱筋ごとに高さの異なる側桁とキャクラを湾曲したマガリと称する材でつなぐ。一方、スヤは太い柱でも6寸角ほどであり、下屋がないため、当然のことながらつなぎ梁とマガリはなく、椀首組の単純な構造である。

2. 二神島の民家

二神島には平地はほとんどなく、傾斜する土地を利用して家が密集している。地形を反映して敷地は複雑な形状をとり、その敷地を最大限に生かして建てられた建物もまた多種多様である。実測調査を行った85戸の平面は85通りの変化を示すといっても過言ではない。これらの民家は近年の新築・改造による鉄板葺等のものを除き、すべて瓦葺である^{註17)}。主屋の建築年代が判明したものあるいは推定できるものは調査した85戸中71戸であり、それらは江戸時代7戸、明治時代21戸、大正時代5戸、昭和の大戦前18戸、大戦後20戸である。

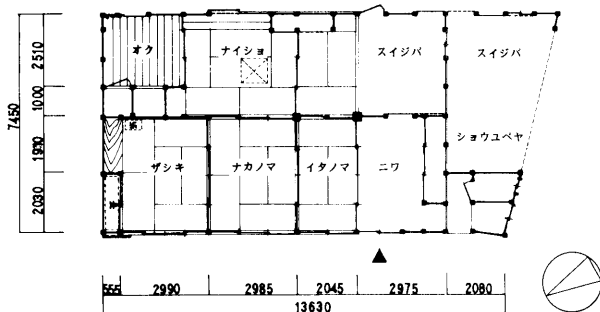


図-7 二神島 岡田正之家現状平面図

二神島の民家は建物配置に大きな特色がある。すなわち、中庭形式とでも呼ぶべき配置をもつものが多い。敷地の奥に主屋、手前の道路に面した所に二階建のへやを置き、両者はヒノラと呼ばれる中庭を介して相対する。さらにヒノラを囲むように便所・風呂・物置等の付属屋を配置する。ヒノラには小さな池や植木を配することが

多い。そして主屋は主人一家、へやは老人の隠居部屋もしくは結婚前の子供の居室として使われる。

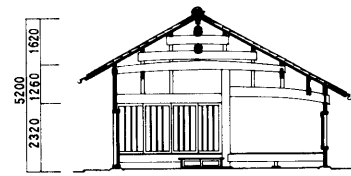


図-8 二神島 岡田正之家現状断面図

各戸は多様な平面構成をもつが、主屋の平面だけは類似性が高い。それらは地元で「四畳半くんだり」・「おもて六畳」と呼ばれる2種の典型的な平面に大別できる。「おもて六畳」はイタノマ（ザシキに続く部屋、今はどの家も畳を敷くが、元来は板の間）が6畳敷きの広さをもつことによる名称で、「四畳半くんだり」はそこが4畳半である。この2つの名称は、単にイタノマの広さの違いを示すだけではない。イタノマとその奥のナイショを合わせた長さが主屋の梁間となるが、ナイショはどの家も梁間1間半だから、「おもて六畳」の場合は梁間が3間半（イタノマ2間・ナイショ1.5間）、「四畳半くんだり」は梁間3間（イタノマ・ナイショとも1.5間）となる。すなわち2つの名称は、そのまま主屋の規模を示すことにもなる。さらにそれは、規模だけでなく建物の格も示しているように思われる。二神島で最も古い家とされる「六軒組」のうち、平面の明らかな3棟はいずれも「おもて六畳」であり、明治時代以前にまで遡る28棟のうち、本家・分家の別が判明する17棟はすべて本家が「おもて六畳」、分家が「四畳半くんだり」となっている。また、おもて六畳・四畳半くだりのいずれかになっている家を時代別に見た場合、江戸時代は7棟すべて、明治時代は21棟中20棟、大正時代は8棟中7棟、昭和の大戦前は15棟中10棟、大戦後は20棟中6棟となっており、近年のものほど少ない。伝統的な平面形式が次第に少なくなりつつあることを示している。

3. 両集落の民家の比較

両集落の民家を比較して、主要な特色のいくつかを示せば次のようになる。

配置について見ると、中ノ俣では屋敷地を建物で囲むような例はなく、むしろ屋敷境界の不明なものが多いほどである。また、古い土蔵をもつ家もあるが、納屋等の付属屋は近年の新築が多く、従来は主屋1棟の構成の民家がほとんどであったと考えられる。一方、二神島では先に述べたごとく、屋敷地を主屋や付属屋で取り囲む中庭形式となるものが極めて多く、へや（門長屋）等は欠くことのできない付属屋である。

主屋について見ると、江戸時代から第2次大戦まで、

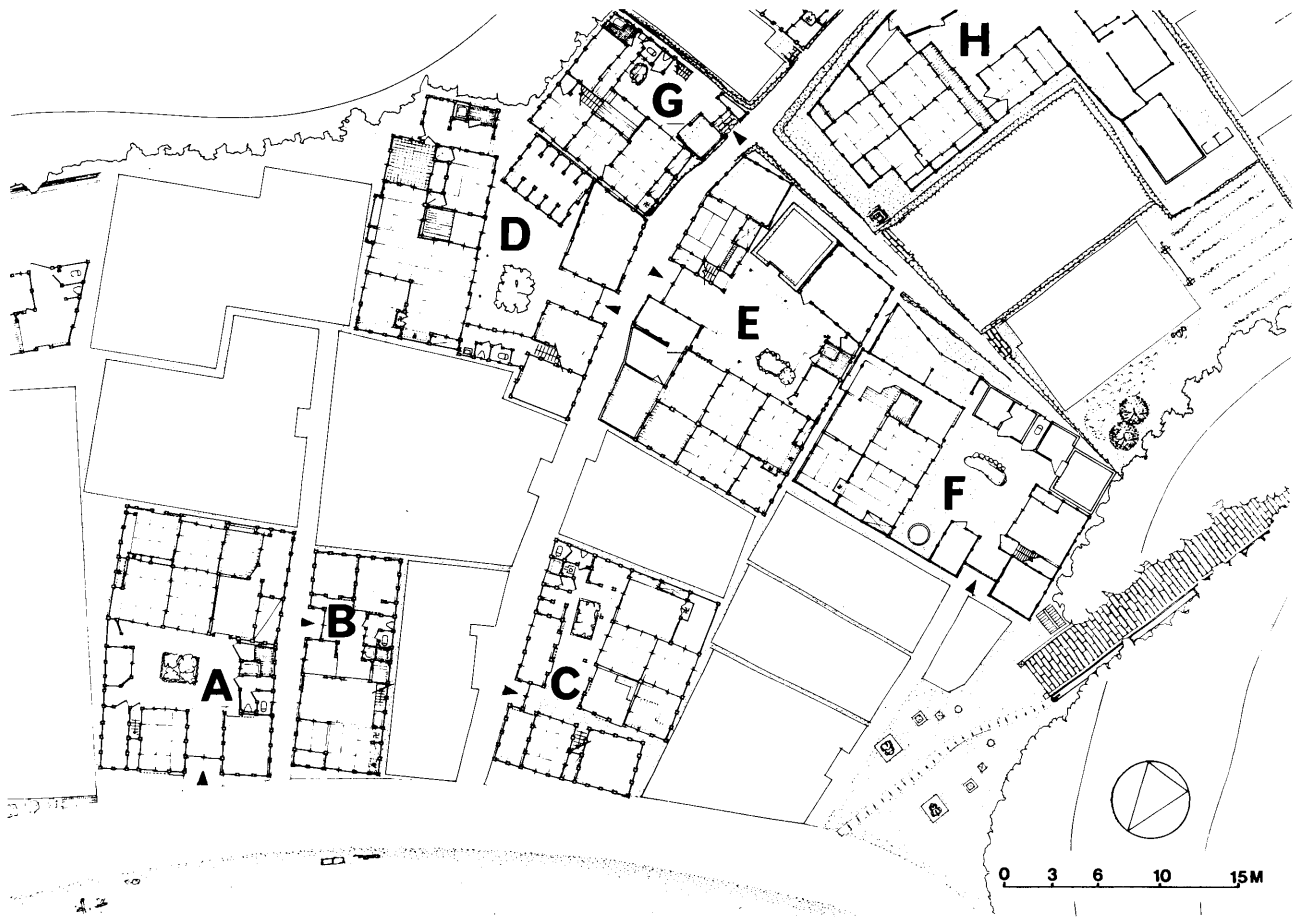


図-9 二神島 小泊の民家 配置図・平面図 (A・C・D・E・Fは中庭形式とでも呼ぶべき配置をよく示している。黒三角印は2階建のへやと呼ばれる建物の1階にあげられた門)

中ノ俣では茅葺・杵首構造で、方3間ほどのチャノマを中心に配した独特の平面形式を踏襲してきた。一方、二神島では瓦葺・和小屋構造で、おもて六畳・四畳半くだりと呼ばれる2つの平面形式の民家であった。

III 祭礼から見た中ノ俣・二神島の集落の特色

1. 中ノ俣気比神社の祭礼

中ノ俣には神社は1つしかない。集落の北のやや小高い位置にある気比神社がそれである。祭神は帯仲津日子尊・大物主神・建御名方命・八坂登売命、相殿神として保倉神・息長帯姫尊を祀っている。天長3年(826)に越前国敦賀郡気比神宮より勧請したという由緒を誇り、文政6年(1823)に正一位神階勅許、明治6年村社に列せられたという^{#18)}。勧請については裏付けを欠くが、文政6年の神階勅許は神社所蔵史料^{#19)}によって裏付けることができる。

同社の祭礼は年3回行われており、5月3日・4日の春祭(祈年祭)、9月1日の例祭、11月15日の秋祭となっている。このうち春祭には神輿渡御と神樂が行われ、集落挙げての行事となる。

2. 中ノ俣の神輿渡御

神輿は気比神社を出発し、集落を一巡してまた神社に戻る。一巡する経路および集落内で神輿が休憩する5つの地点は古来決まっているという。その経路は、中ノ俣川を挟んで点在する家々とそれを結ぶ道とを縫いながら集落内をぐるっと回って設定され、休憩する5地点もまた、ほどよい間隔をあけて設定されている。

集落こぞって参加する祭礼であるから、集落内をくま



図-10 中ノ俣 気比神社祭礼の神輿渡御

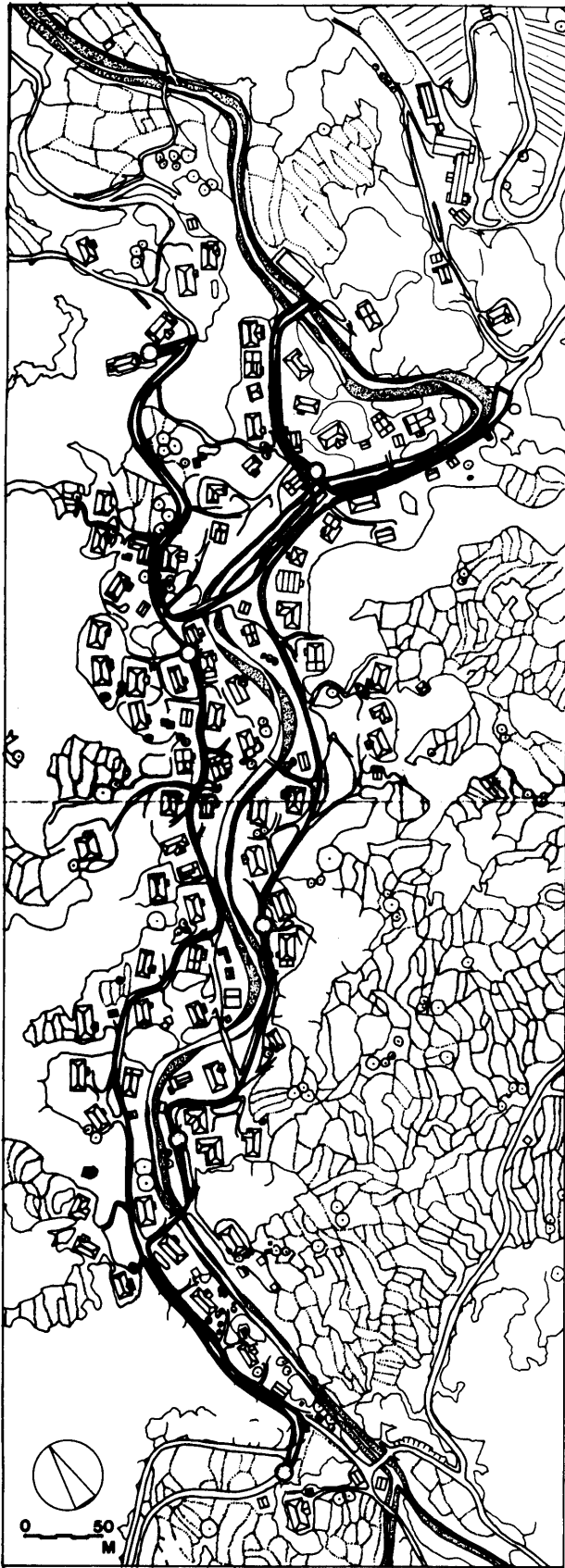


図-11 中ノ俣 気比神社祭礼神輿渡御の経路と休憩位置
(黒線が経路、丸印は休憩位置)

なく回るのが望ましい。しかし重い神輿を大勢でかつぐため、あまり細い道は通れない。急坂も、あるいは袋小

路も具合が悪い。とすれば経路はおのずから決まってくる。また、休憩地点も、重い神輿を最後まで無事にかつぐためとあれば、おのずから位置は決まってくる。大勢のかつぎ手と見物人を考えれば、できれば多少なりとも広い場所が望ましく、ますます場所は限定される。したがって経路も休憩地点もおのずと決まったに過ぎないように見える。だが、さらに一步踏み込んで考えると、経路が一巡すること自体、集落の空間構成をよく反映したものであることに気付く。集落内の家々は中ノ俣川の両側に川に沿って散在し、道は川の両側を通っている。神輿がぐるっと一巡するとき、往路と復路とで川の両側を通ることになる。ここで注目しておくべきことは、道が川の両側を通るのは集落内部だけだという点である。隣の集落から山の中をくねくねとたどってきた1本の道が集落の中だけ枝分かれして2本になり、集落の端でまた1本になって次の集落へと向かう。この道を街道と呼んでも差し支えないが、この集落は、街道筋の多くの集落のように道路の両脇だけに沿って存在するのではない。構成が宿場町的ではないことが確認される。

次に休憩地点だが、地図上で確認すればよくわかる通り、間隔は同じではなく、また必ずしも広いからとの理由で位置が選ばれているのでもない。古老によれば、この5地点は、かつて集落が5つに分けて管理されていたことを反映したものだという。その5地区をそれぞれまとめていた実力者あるいは特に旧家として知られる家などの前で神輿が休憩し、その家々が神酒や酒肴を振る舞った。今は公民館前や地区センター前で休憩するので多少位置がずれてはいるが、それでもなお、集落の歴史を強く反映しているという。その5地区は、中ノ俣川と、そこに注ぐ小さな流れ、道などで区切られており、集落の空間構成を示すものにほかならない。

以上のように、気比神社の祭礼における神輿渡御の経路と休憩地点は、この集落の歴史と空間構成とを如実に反映している。

3. 二神島の祭礼と神輿の経路

二神島にも神社は1つしかない。港の奥の丘の上に鎮座する宇佐八幡神社を島の人々は八幡様あるいはオミヤサマと呼んで尊崇する。応神天皇を祀り、嘉保元年(1094)に八幡神を勧請したのに始まるという^{#20)}が裏付ける資料を欠いている。祭礼は秋である。日時は決まっていない。その年の宮総代が神職と相談して決める。昭和61年は9月27・28日、62年は10月17・18日に行われた。

過疎化の影響で祭礼は年々困難の度を増している。3基ある神輿のうち、61年には1基だけかつぎ出されたが、62年には遂に台車に乗せて引く状況になった。以下に述べる神輿の経路は主に61年の調査に基づいている。

神輿は丘の上の神社から石段を下り、海岸沿いの道を

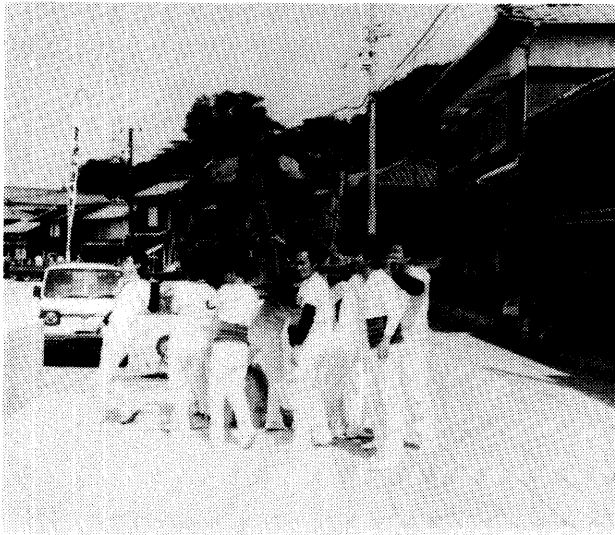


図-12 二神島 宇佐八幡神社祭礼の神輿渡御

通ってあらかじめ用意された神事の場に据えられる。神事後、神輿は港へ向かう。舟に乗せられ、港を出て海上を3回大きく回る。このとき舟上では舟踊りが奉納される。港へ帰り、ひととき宴が開かれた後、神輿は集落の東端、脇之浜まで行き、そこから後戻りして集果場に据えられ、ここでまた宴となる。再度出発した神輿は集

落の西端本浦まで行き、また後戻りして集果場に行き、そこから石段を上って神社での神事へと向かう。この間数箇所^こで神輿を下ろして休み、また、神輿を高くかかげて女性がその下を潜ることがくり返される。

神輿の経路は、海沿いの1本の道の往復が基本となっている。道はそこから山に向かって複雑に枝分かれしているが、神輿はそこへは全く入らない。枝分かれした路地は奥へ行くに従い細く、ある場合は坂道、ある場合は石段となって次第に山に登る。奥の方で連結する路地もあるが、多くは海岸まで一度戻らないと横へ行くことがむずかしい。神輿がこの路地を通らないのは当然と言えば当然だが、海沿いの1本の道のもつ意味が、神輿の経路をたどることによって実に鮮明に見えてくるのもまた事実である。

二神島の中は西から本浦・小泊・向井・泊・脇之浜の5つの単位に分かれている。その5つの単位は先に述べた枝分かれした細い路地を境界としており、どの単位も海沿いの1本の道に面している。他の単位に行くには原則としてこの海沿いの道に一度出てから枝分かれした路地をたどることになる。海沿いの道はいわば動脈の役割を果たす。

この道の片側には家並みが続き、他の側は堤防を経て

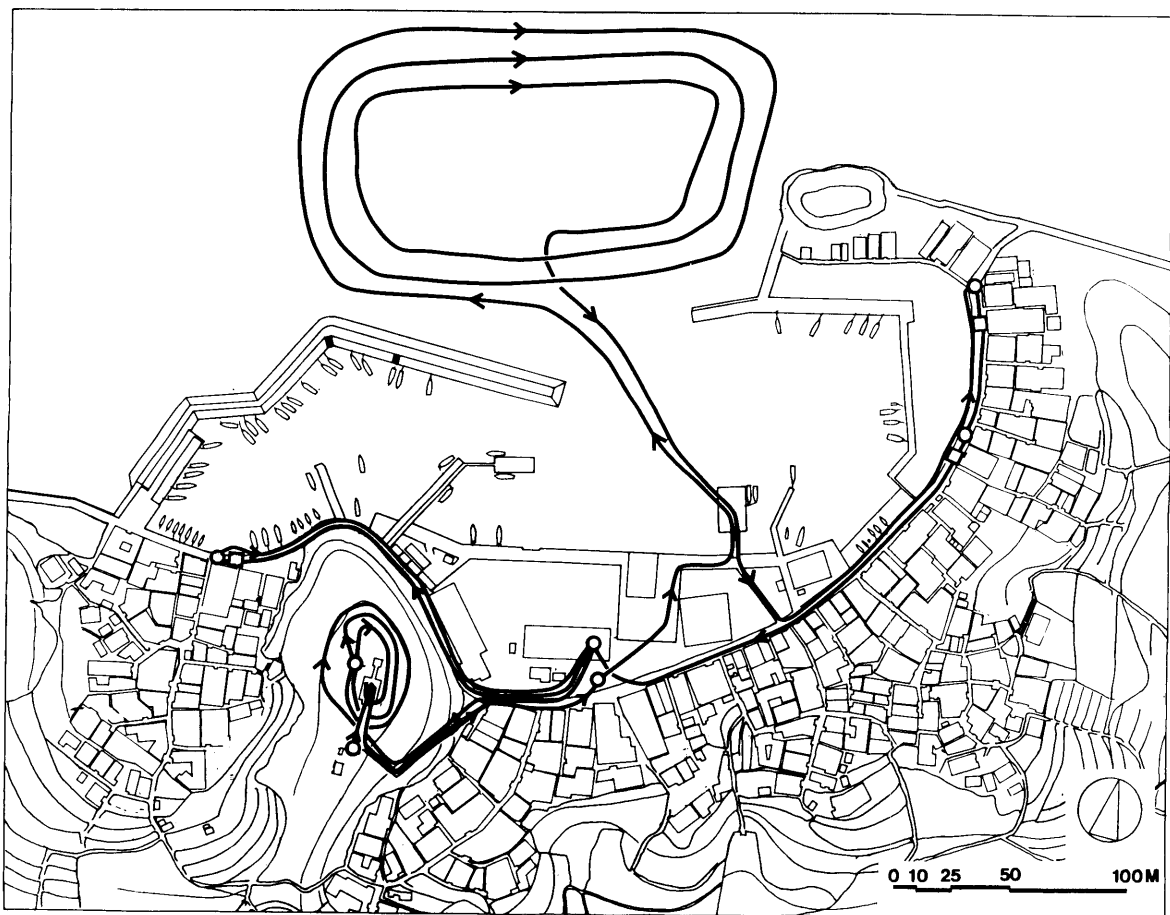


図-13 二神島 宇佐八幡神社祭礼神輿渡御の経路と休憩および女性が神輿の下を潜る位置（黒線が経路、丸印が休憩位置、四角印が神輿を潜る位置。神輿が船で海上を3度回る経路はこの図より海上はるか外だが、ここでは模式化して示した）

港となっている。かつてここには白砂青松の言葉にふさわしい美しい海岸があった。昭和25年と同34年の宮本常一氏、同47年のウィリアム・グレイブス氏の報告に載せられた写真²¹⁾は、当時の海岸が砂浜であり、漁船がそこに引き上げられ、砂浜に魚を干していた様相を雄弁に物語っている。すなわち現在の海沿いの1本の道は、かつて海岸に通っていた道であり、海岸そのものだったと言っても差し支えない。二神島の集落は、5つの単位すべてが海に面して位置し、海との密接な関係を保持しつつ人々は生活してきた。集落の空間構成の特色は、海と密接につながっていたというこの1点に集約される。現在、海沿いの道が堤防によって海から遠ざけられ、一見したところその集落構成の特色が不鮮明になった。しかし、神輿の経路をもとに考えた結果、改めてその特色を確認することができるのである。

4. 中ノ俣と二神島

祭礼における神輿の経路をもとにして、集落の構成の特色を以上に見た。両者を比較すれば、それぞれの特色はさらに明確になる。

中ノ俣の神輿経路は輪を描いて一巡するのに対し、二神島の場合は直線的な往復である。そしてそれが集落の空間構成と歴史とを反映したものであることもすでに見た。

中ノ俣の場合、集落内の家々80戸は隣家と間隔をあけて散在している。家々の背後には山が迫り、平らな敷地を広く取る余裕はないが、それでも各戸が狭いといえ庭を個々に所有し、敷地を個別に確保することが可能である。一方二神島の場合は、港に面した狭い範囲に150戸ほどが密集して建っている。軒を接して建つ家々の間を細い路地が折れ曲がりつつ通る。路地を通れば家の中の話し声が聞こえ、見上げれば屋根と屋根が空を細く鋭く切り取っている。路地は海から遠ざかるにつれ次第に登りとなり、家々の間から海が見える。漁業を生業とする人々にとって、海が見えることは重要な意味をもっているに違いない。この点もまた、二神島が漁村集落であることを強く印象付ける。

IV 生活習慣の特色——「えがえ」と神様

1. 中ノ俣の「えがえ」

集落内の年中行事や民具等の調査も進めているが、ここでは民家に関連して「えがえ」（家替）を取り上げよう。「えがえ」は集落内の2戸が互いに家を交換することで、5例10戸を確認したが、ほかにもあると言われている。下室多作氏（81歳）の御教示によれば、同氏は昭和の初めに「えがえ」をし、建物だけでなく屋敷地・屋敷林を

ともに交換し、相手方から百円もらったという。「えがえ」はこのように大ききの違う家の間で行われ、大きな家を

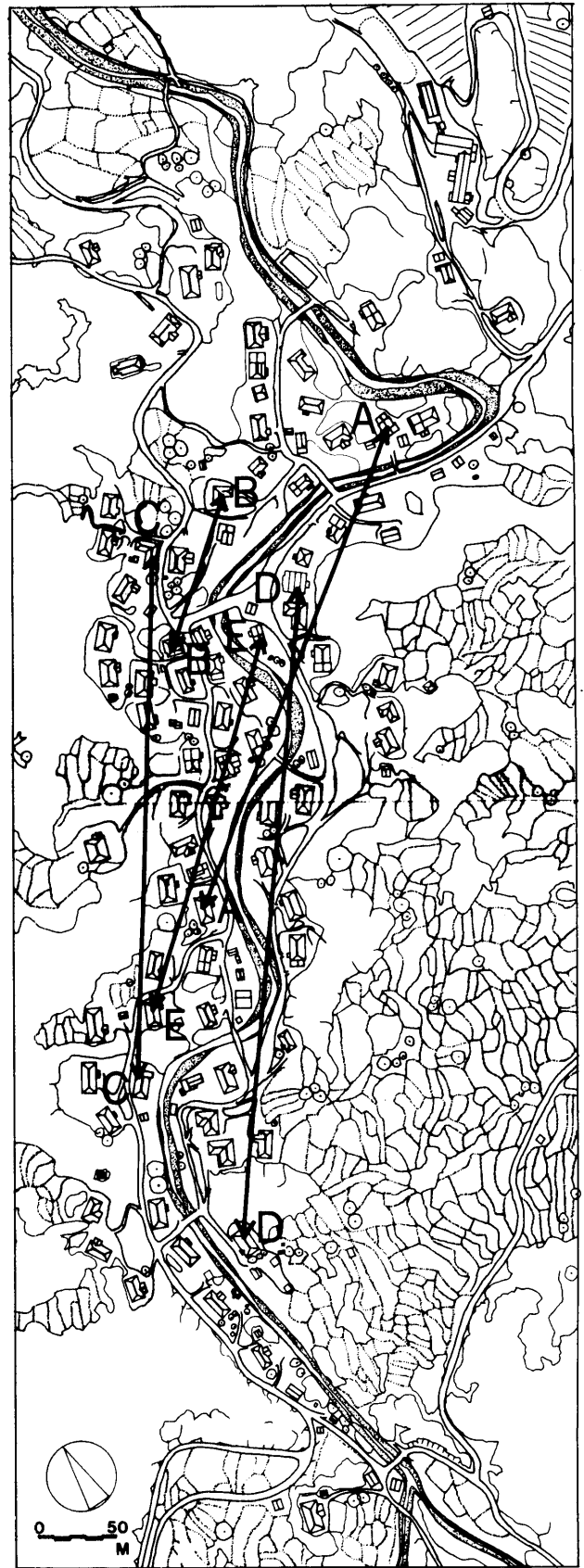


図-14 中ノ俣の「えがえ」
(図中 A と A が家を交換したことを示す)

手に入れた者が相手にお金を払う。集落内には親類関係や本家・分家、親分・子分という家と家の関係があるが、交換はこれとは無関係に行われる。交換の際、家具とともに仏壇と神棚も互いに持参する。ただし、神棚は移さず、移った先の神棚をお祓いして使うこともある。仏壇は持参するが神棚は持参しないことがあるという点から、仏壇は住み手に、神棚は建物に所属するのではないかと考えられる。仏壇は住み手の先祖の霊を祀るもので、その霊は住み手とともにある。一方神棚はその家の建物や屋敷を祀るものであって、必ずしも住み手とともに移動しないでもよいのかもしれない。

大小の家の交換という点は、家族構成の変化にともなう合理的交換とも考えられるが、それだけでは理由として不十分である。新築で不要となった古い家を譲り受けたとされる家が集落内に多く、桑取谷から移したとされる家も5棟ある。豪雪地帯ゆえ柱や梁は頑丈なものが必要であり、「えがえ」によって大きな家に移るのは、材木が入手しにくく、新築が困難なためかもしれない。

家を互いに交換するわけではないが、中古の家を屋敷・屋敷林ごと買って移り住む例は、近隣能生谷の高倉の集落でも5例確認されている。この移転を「えがえ」と

と呼んでいる場合もあり、これらの例は「えがえ」の風習のなごりではないかとも考えられる。

二神島ではこのような家の交換は行われていないが、住み手がいなくなったり、何らかの理由で不要になった場合、その家に他の家から移った例は確認されている。しかし、まだこの点に関する調査が十分でなく、今後の課題だと考えている。

2. 二神島の神様

二神島の人々はさまざまな神様とともに生活している。たとえば古泉信子家では、ザシキ（6畳）の床の間に氏神様（ハチマンサマ・オミヤサマ）、ナイショ（4畳半）の鴨居の上にエビスサマ、カマドに荒神様を祀る。黒子正義家では、床の間に氏神様、ナイショの鴨居の上にエビスサマ、台所にジンヌシサマ（地主様）、洗濯機の脇に水神様を祀る。神様に供えるものは季節によって変わる。お正月は松竹梅、旧の三月には桜、五月にはよもぎとすすき（篠）、秋祭りには松と柏槇である。

増野幸正家では、ザシキの床の間にハチマンサマ（八幡様）、ナイショにエビスサマ、ニワの隅のカマド（今はないが昔あった）の奥にコウジンサマ、中庭であるヒノ

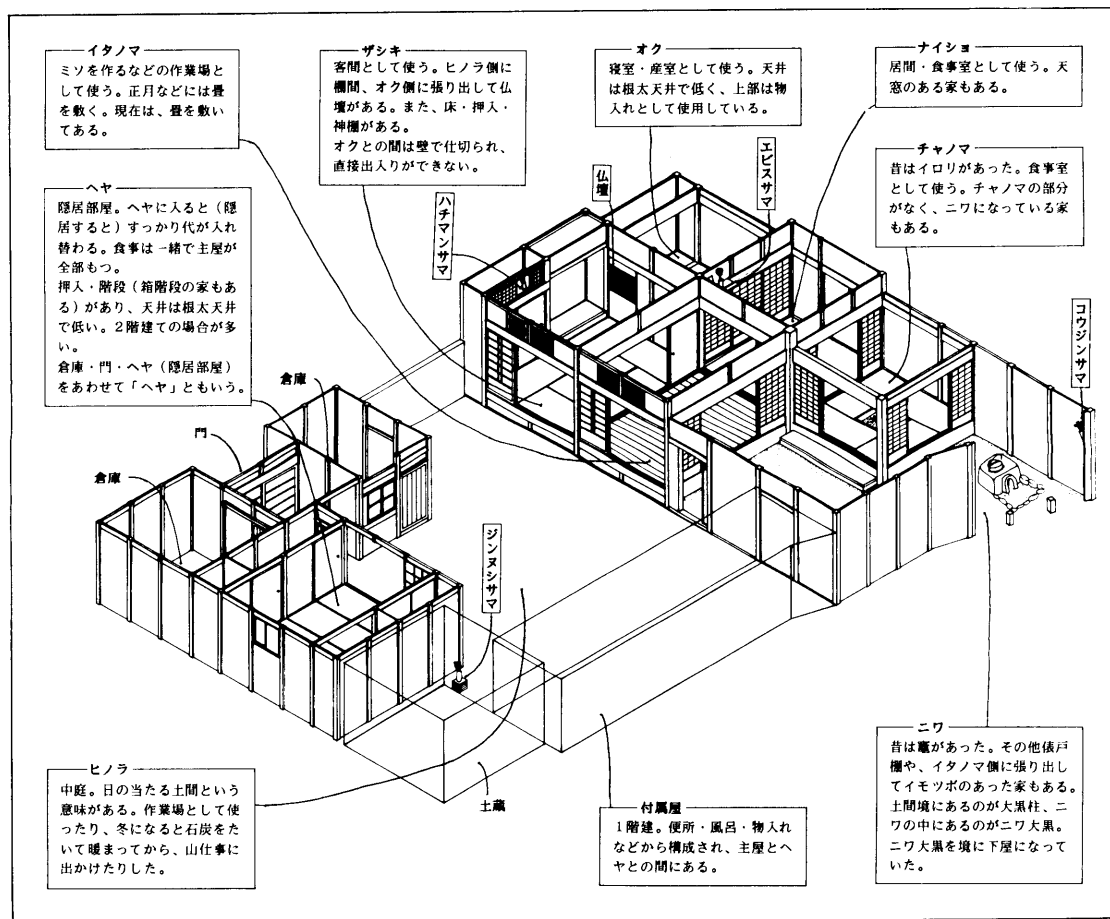


図-15 二神島 増野幸正家の部屋の使い方と神様の位置（手前の土蔵・便所などは単線で示した。図-9のFが増野家）

ラの一画、土蔵の前にジンヌシサマを祀る。ジンヌシサマにはシャシャキを供える。シャシャキはシキミに似ているが別物で、隣の島である津和地島からわざわざ取りにくるという。

このほか、イタノマの天井から木製の棚をつり下げ、正月に恵方^{えほう}へ向けて回す家もある。この棚はカタタガエあるいはオタナサマと呼ばれている。

このように、氏神の八幡様、漁業の神である恵比須様や龍王様、屋敷神の地主様、火の神の荒神様、水の神の水神様等を各家がそれぞれ適当な場所に祀り、松・桜・桃など季節ごとの植物を供えている。

一方中ノ俣では、神棚をもち神様とともに暮らしているが、二神島のように多くの神様はいないようである。しかしこの点については、今後さらに調査を進める予定にしている。

結

中ノ俣と二神島の両集落の調査結果に基づき、民家集落の特色を中心に検討し、比較を行った。

ここにまとめれば次の通りである。

1. 中ノ俣は新潟県の山村集落、二神島は瀬戸内海の漁村集落で、ともに江戸時代まで遡る古い民家があり、江戸時代以来の集落構成や生活慣習をよく残している。また、現在過疎化が進んでいる点も共通している。
2. 中ノ俣には70棟ほど「くずや」と呼ばれる茅葺民家があり、最も古いものは天明5年(1785)まで遡る。平面はチャノマを中心とするほぼ共通した特色をもっている。二神島には調査を終了した85戸中第二次大戦以前に遡るものが51戸あり、そのうち江戸時代のものが7戸ある。「おもて六畳」「四畳半くんだり」と呼ばれる2種の典型的平面をもつ主屋のほか、門のある「へや」と呼ばれる建物などがあり、「ヒノラ」と呼ばれる中庭を囲んで建物が建ち、中庭形式とでも呼ぶべき特色ある配置をもっている。
3. 両集落とも集落に神社が1つあり、祭礼の神輿渡御における神輿の経路は、集落の空間構成や歴史をよく反映している。中ノ俣は集落内をぐるっと一巡し、二神島は海沿いの道を往復する。その経路を比較すると、両集落が一方は農村的、一方が漁村的な集落構成になっていることが確認される。
4. 両集落とも特色ある生活慣習が残されており、中ノ俣では「えがえ」(家の交換)、二神島では家に祀る神々が注目される。

調査はまだ途中の段階であり、今後調査を継続するとともに、より詳しい検討を加え、両集落の空間構成の特色や、歴史的背景を分析する予定である。特に1つの集落だけ見ていては気付かぬ点が両集落を比較することによって判明することを重視し、常に比較する視点を保ちつつ研究を進めたいと考えている。冒頭に述べた通り、この2つの地点を調べただけで論を広げることは無理であって、意図するところではないが、比較の視座は大切にしたいと思っている。

<注>

- 1) 『中ノ俣、上綱子』(上越市立中ノ俣小学校、昭和62年)によると、昭和20年代後半には60戸以上の農家が炭焼きを行い、月間3,000俵が生産されたという。30年代後半には炭の需要が減るとともに衰退した。
- 2) 『上越市統計要覧』上越市役所。
- 3) 『中頸城郡誌』新潟県中頸城郡教育会編、昭和16年
- 4) 町内会長、山根貞夫氏の御教示による。
- 5) 『中島町統計書』愛媛県中島町、昭和55年。
- 6) 二神司郎家文書
- 7) 網野善彦『伊予国二神島をめぐる』歴史と民俗1、平凡社、昭和61年4月。
- 8) 『中島町誌』中島町役場、昭和43年。
- 9) すでに述べた通り、明治11年当時も現在も二神島は半農半漁であるが、さらに遡って江戸時代は漁業主体だったとされ、集落形態も漁村と呼んで差し支えない。以下漁村集落として扱うのはそのためである。
- 10) 『越後の民家―上越編』新潟県教育委員会、昭和55年。
- 11) 長野家は気比神社神官の家系である。気比神社蔵の『系図一卷』の長野紀伊(安政4年没)の項に「文化年中、続目上京シ祠官ヲ改メ神主号免許致シ亦家ヲ起ス」とある。
- 12) 北島一司氏の御教示によると、現当主(60歳)が10歳のころ百年祭を行ったという。逆算すれば天保年間になる。
- 13) 大家火災で類焼、その後まもなくの建設と伝えられる。大家火災は牛木喜九家蔵『代々家柄覚』の明治4年10月の記事に続けて「牛木大家へ縁セシニ火事に逢」とあり明治4年のことと考えられる。
- 14) 田中悌二氏の御教示によると、3代前の善九郎が明治7年に建設したとの言い伝えがある。また当時の板図が残されている。
- 15) 小さな煙出しを妻面に設けるものもあるが、ここでは寄せ棟造りとしておく。
- 16) 直屋では梁行、桁行の規模、中門造りでは張り出した中門を取り除いた規模。
- 17) 二神島に以前は茅葺民家が存在した。矢野常一氏の御教示によると、矢野家は天正7年の再建であるが、前身の建物は二神島に最後まで残された茅葺民家の1つであったという。
- 18) 『中頸城郡誌』第四巻、中頸城郡教育会、昭和16年。
- 19) 気比神社蔵『御神階上京諸事記録(文政6年)』。
- 20) 注8)に同じ。
- 21) 宮本常一『私の日本地図・瀬戸内海I』同文館、昭和40年、Living in a Japanese Village By WILLIAM GLAVES Photographs by JAMES L. STANFIELD (NATIONAL GEOGRAPHIC VOL. 141, No. 5 MAY 1972)

<研究組織>

主査 西 和夫 神奈川大学工学部教授
委員 津田良樹 神奈川大学工学部助手